

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：10101
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2012～2014
 課題番号：24501266
 研究課題名(和文) 千島・北海道東部出土遺物を用いた複合的な資料情報の収集・活用に関する基礎研究

 研究課題名(英文) Fundamental researches about collecting and utilizing the complex document information of the archeological materials from Kurile Islands and East Hokkaido.

 研究代表者
 加藤 克 (KATO, Masaru)

 北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター・助教

 研究者番号：50321956

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：北海道大学植物園・博物館所蔵千島・根室採集考古資料の資料目録を作成することを目的として、所蔵全資料の撮影および注記類のデータベース化、調査を行い、従来千島採集資料として位置づけられてこなかった資料を含め、約2,000点の千島採集資料目録の原稿を完成させた。目録には、1930年代の採集調査時の精細写真および資料寄贈者からの書簡、博物館における管理記録などの周辺情報の調査結果もまとめ、千島考古学研究の上で質量ともに重要な資料群の今後の研究利用の効率化、活性化に寄与するものとした。

研究成果の概要(英文)：We examined the all archaeological materials holding Hokkaido University Museum (HUNHM) in order to publish catalogue of materials from Kuril Islands. We researched the notes, labels of the materials to clarify the locality, collector, and dates. As a result, we found about 2,000 materials from Kuril. In addition, we found three letters from the donors, some newspaper articles about materials and many pictures taken by researchers in collecting trip at the Kuril. From cross-checking the information and materials, we could add some accession information to the materials. We researched collections in another institution to assess the value as research resource of the HUNHM collection. From this assessment, HUNHM collection was placed basic and important materials for archaeology of the Kuril. HUNHM will publish the catalogue including measured drawings, pictures of collecting trips in autumn of 2015, this catalogue will promote the development of archeological research in Kuril area.

研究分野：博物館資料史、博物館史

キーワード：博物館資料学 博物館学 考古学 地方史 千島

1. 研究開始当初の背景

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館は、明治10(1877)年に設立された日本有数の歴史をもつ博物館である。設置主体であった開拓使が運営していた時代に収集された歴史民族資料・動物学資料は北海道史および自然史上重要資料として位置付けられており、従来から様々な形で研究に用いられてきた。明治17年に札幌農学校(現在の北海道大学)の博物館へと移管されたのち、農学部の博物館として、動物学を中心とした研究資源の収集・保存管理活用に寄与してきたこともよく知られている。

しかしながら、少数の博物館スタッフで運営されてきたことから、所蔵する資料すべてが適切に管理・活用されてきたわけではない。例えば、明治期の博物学資料として重要であるにもかかわらず、資料情報が失われていた絵画資料や明治期のアイヌ文化を示す資料としての収集情報の欠落など、人文系の資料や標本・資料の歴史的情報においてその傾向が強く、いわば「死蔵」という状況にあった。申請代表者は、博物館の資料管理者として、明治期の標本台帳や古文書、標本ラベルなどを駆使してそれらの資料情報の復元にあたり、アイヌ民族資料、絵画資料、鳥類標本、写真資料群を新たな研究資源として再生させてきた(加藤2007、科研課題番号18720159ほか)。その成果は、申請代表者およびその他の研究者の実績としての進展だけでなく、研究活動の協力者となった地域の博物館学芸員らによって博物館の展示や社会教育活動などにも有効に利用されてきているが、考古学資料については部分的に検討が行われたのみである(加藤2001)。

北大植物園・博物館所蔵考古資料は、大きく分けて二つの収集経緯があると考えられる。一つは、開拓使の鉄道開設事業や札

幌農学校初期のフィールドワークにおいて収集された資料群である。本申請の研究対象であるもう一つのグループは、昭和初期に博物館スタッフであった名取武光が中心になって収集した資料群である。名取は、北海道における考古学黎明期の中心人物であり、彼が収集した資料は研究活動に基づく重要資料であるが、名取の異動後は、考古学担当職員が配置されなかったこともあり、著名な遺跡、大規模コレクションを除く資料群については、注目されることが少なくなってきた。

以上のような歴史的背景の中で、博物館所蔵古写真に関わるプロジェクトの調査活動が実施され、(1)名取が撮影した南千島遺跡調査の写真や遺物の写真が確認され、報告(名取1933、1940)中に引用されていた遺物の特定が可能となったこと、(2)研究協力者として参加している猪熊樹人(根室市歴史と自然の資料館)によって、根室市弁天島遺跡出土資料の重要性が指摘されたことから本研究プロジェクトが立案されることとなった。

南千島の考古学的研究は、昭和初期に名取武光ら北海道帝国大学関係者によって遂行されたが、その後の政治的事情から研究活動や資料収集活動が停滞していた。また、南千島の遺跡との関係の深い弁天島遺跡も1878年にお雇い外国人ジョン・ミルンが発掘した歴史的に重要な遺跡であるが、多くの研究者が発掘に関わったため、遺物は全国各地に分散しており、総合的な調査が困難な状況にあった。しかし、近年、東京大学の鳥居龍蔵コレクションの目録が刊行されたことやカムチャッカ・千島の文化・生態系に関する大規模な国際プロジェクトが展開されるなど、研究面での大きな発展が期待される状況のなかで、北大所蔵資料を研究資源として再生させることは、単なる博物館の資料整理ではない、学問的な貢献

につながるものと位置付けられる。

2. 研究の目的

本研究プロジェクトは、北大所蔵資料のうち、千島列島および根室において収集された遺物約 2,000 点弱を、博物館資料管理史の観点から再検討を行い、研究資源としての価値の基盤となる資料情報が適切に付属しているのかを確認し、欠落している場合は歴史学的観点からそれらを補う。また、所蔵考古資料の悉皆調査を並行して実施し、過去の資料管理の過程において千島列島および根室出土という情報が欠落した資料の存在の有無について確認したうえで、本プロジェクトの調査対象とすべき資料を増加させる。この基盤調査を実施した上で、考古学的観点から整理・検討し、総合的な文化資源としての地位を確立する。

歴史学的観点からは、北大植物園・博物館に所蔵されている古写真や名取宛の書簡類の調査を行い、収集の経緯や資料情報の追加を試みると同時に、当該期に北大が研究資源の蓄積にどのように寄与していたかについても明らかにする。また、事前調査から、弁天島出土遺物は、根室在住の在野研究者によって収集されたものであることが確認されており、根室地域の古記録などを用いて、ローカルな視点からの考古学史の解明を試み、地域の普及教育などに有効利用できる資源の発掘・創出を目指す。

考古学的観点からの調査としては、(1) 各資料の実測・写真撮影を行い、資料図録の発行や展示・普及活動などに利用しうる視覚資料を整備する、(2) 国内外の各機関が所蔵する千島列島出土資料との比較検討を通じた資料の年代的な位置づけと地域的特徴の把握、(3) 石器使用痕分析や土器の地域色、動物遺存体の組成論を用いた千島列島におけるオホーツク文化集団やアイヌの活動時期とその展開過程の解明、を実施する。こうした検討によって、北大植物園・

博物館所蔵の根室・千島資料の基礎的な情報の共有をはかるとともに、近年急速にデータが蓄積されつつある噴火・地震・津波などの災害史の情報を組み込んだ千島列島における人類の資源利用・適応戦略についての議論を大きく前進させることを目指す。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために、対象となる考古学資料に対して、博物館所蔵資料としての管理過程を資料そのものから読み解く資料学的アプローチ、収集や寄贈の過程を、文献史料を用いて把握する歴史学的アプローチ、考古学的な情報を整理し、学術的な評価・検討を行う考古学的アプローチを行い、各分野に提供する研究資源化を行う。同時にそれらの情報を統合し、あらゆる分野・利用者を対象とする分野横断型の博物館資料として、広く社会に発信する。

役割分担は、資料学的アプローチ(代表者加藤)、歴史学的アプローチ(代表者加藤・協力者猪熊)、考古学的アプローチ(分担者高瀬・協力者猪熊)とし、情報統合は各側面からの重要性を検討しつつ三者によって実行する。

(1) 資料学的アプローチ

研究対象を確定するために、博物館所蔵資料台帳に基づいて千島列島・根室出土考古資料を抽出、リストを作成する。これと並行して、所蔵されている全考古学資料(約 15,000 点)およびその注記、付属ラベルの撮影を実施する。ここから得られた注記・ラベル情報については、研究代表者が継続して実施している手法を用いて、博物館データベースにその注記の種類ごとに区分して登録し、各資料のコレクターや収集・管理年代の絞り込み、また資料台帳から欠落した情報などを追加する。これにより、資料台帳の記載情報に基づいて作成したリストから漏れていた千島・根室出土資料を見出し、対象資料を増加させることを目指す。

また、撮影した写真を利用し、先行研究に掲載されている写真や図版、博物館所蔵写真に写されている資料との比較照合を行い、現時点で千島・根室出土資料という注記は存在しないものであっても、調査対象となりうるものを見出す。

(2) 歴史学的アプローチ

博物館所蔵考古資料の大部分においては、採集者、採集時期の注記が付属せず、千島・根室出土資料という情報が付属しているものであっても、詳細な採集地や採集目的、また先行研究における利用実績などが不明な場合が多い。個別の資料の採集者・採集時期を明らかにすることができるならば、より詳細な採集地域・場所を明確にすることが可能となり、研究資源としての価値も向上するものと期待される。

以上を目的として、博物館に所蔵されている研究者と資料寄贈者との間で交わされた書簡類の調査、博物館スタッフによって撮影された調査時の古写真の検討、採集・寄贈者として推測される人物に関する史料調査を実施し、資料学的アプローチによって明らかにした資料群の特徴との比較検討を通して、個別資料が有する歴史的背景を見出す。

(3) 考古学的アプローチ

調査対象と位置付けられた千島・根室出土資料を対象に、実測および図面を作成し、考古学的研究（資料そのものの考古学的価値の検討、他機関所蔵資料との比較検討など）の材料としての整備、最終的な目録に掲載するための情報を整理する。

本研究プロジェクトにおいては、博物館資料としての社会発信の基盤情報整備を第一の目的とするが、他機関所蔵の千島出土資料群との比較検討を通じて、北海道大学植物園・博物館所蔵資料の学術的価値を明らかにすること、土器に付着する炭化物の理化学的分析、骨角器の材料となった動物

の特定などの調査を実施し、発信情報の質を向上させる。

(4) 情報発信

以上の調査によって得られた成果を博物館資料目録として刊行し、社会の共有財産である博物館資料の情報を共有する。また、根室市歴史と自然の資料館等において展示活動を行い、研究成果を広く社会に発信する。

4. 研究成果

研究プロジェクト構想段階において、対象となる千島・根室出土資料は1,000~1,500点程度と把握していたが、台帳情報の精査、資料学的アプローチから対象資料と評価された資料の増加(詳細後述)また考古学的観点による資料調査によって1点の資料として管理されてきた資料が複数の遺物によって構成されていることが明らかになったことなどの結果、千島出土資料だけで2,000点弱の資料が所蔵されていることが判明した。一方で、注記・付属ラベルの精査の結果、従来千島出土資料と位置付けられてきた資料のうち、若干ではあるが千島出土ではないものが含まれていたことが判明した。以上のような博物館資料情報の再整備は、将来的な研究活動を健全に遂行する上で重要な作業であり、新知見とはいえないものの、一応の成果であると位置づけている。

歴史学的アプローチからは、寄贈者からの書簡三通が見いだされた。記載内容と所蔵資料との照合の結果、博物館資料台帳において採集者、寄贈時期が明らかにならなかった資料群数十点に対して情報を追加することができた。また、その他の歴史史料調査の結果、博物館に保管されていた物品保管証書の中に千島の学校教諭や寺院などから考古資料が寄贈されていたことが明らかとなり、所蔵資料の入手年代情報や注記されている採集者の詳細情報を追記す

ることが可能となった。

注記・付属ラベルの悉皆調査の結果と歴史学的アプローチとの比較から、朱書きの注記は名取武光を中心とした昭和初期の研究活動や寄贈受入れによる資料群であることが推測された。この結果をふまえ、千島・根室出土資料という情報を持たないものの、朱書きによる注記をもつ資料と昭和初期に発表された千島考古研究(武笠 1934, 名取 1933, 1940 など)に用いられていた図版の原版であるガラス乾板写真とを比較照合した結果、「埋土」という朱書きの注記のある資料が、名取によって 1933 年に国後島古釜布において採集された土器片であることや、1932 年に武笠らによって択捉島で採集された骨角器を再確認することなどの成果を得た。

また、一部の択捉島出土資料にのみ特徴的に付属するラベルが確認された。このラベルは天売島など他の地域の採集資料にも付属しており、それらは「田中」という人物が採集したものであることが判明している。「田中」という人物については、歴史学的アプローチからは解明することができず、その採集時期や採集目的などについては課題として残された。この点に関する調査は今後も継続し、当該資料群の採集年代、詳細な採集場所の解明を試みたい。

根室出土資料については、採集者の一人である谷内田氏の遺族および地域の考古学研究者への聞き取り調査を行うとともに、新聞(地域誌)の調査により北大植物園・博物館への資料寄贈時期、数量等を把握することができた。戦前期の根室における考古学資料の多くは戦災により消失しており、地域の歴史の上でも北大植物園・博物館の所蔵資料が重要なものであることが示された。これらの成果は 2015 年に根室市歴史と自然の資料館において開催した展示会で発表した。

以上の情報整理に基づいて研究対象として確定された資料群の考古学的価値について検討を行った。釧路市埋蔵文化財センター、旭川市博物館、市立函館博物館、マガダンの研究所など千島・根室出土資料を所蔵する機関において関連資料の調査を行うとともに、調査対象土器の付着炭化物の分析を行った結果、北大植物園・博物館所蔵資料は、その数量だけでなく質においても良質な資料群であり、日本国内、少なくとも北海道における千島・道東域考古学研究的基礎資料群として位置づけうるものであることが明らかとなった。これらの基礎資料・情報を共有するための目録作成、発信を本研究プロジェクトの第一目標として位置づけていたこともあり、研究期間内にこれらの資料のみから新知見を見出すまでには至らなかったが、今回の調査結果は当該地域を対象とした考古学研究報告の一部として有益な形で利用することが可能である(高瀬・鈴木 2013, 高瀬 2013, 猪熊 2013, 高瀬 2015 など)ことは示すことができた。2,000 点弱に及ぶ資料リストと 100 点弱の図版、1930 年代の精細な調査資料写真を含む資料目録の刊行(2015 年秋刊行予定)により、研究利用者が増加し、研究活動が活性化することで、新たな知見が集積されるものと期待される。

本研究の目的を達成するために、北大植物園・博物館所蔵考古資料の 98% 余りの写真撮影、全資料の注記、付属ラベルのデータベース化を実施したことで、本研究の対象と位置付けなかった他地域における採集資料の情報も整備され、また画像による効率的な事前調査が可能となった。所蔵資料の研究資源としての価値向上と研究利用者の利便性の向上に大きく寄与したことも本研究の成果の一つと評価している。

< 引用文献 >

武笠耕三、南千島の旅、蝦夷往来、13、

1934、14-23

名取武光、南千島の発掘旅行記、1933、
(名取武光著作集、1、4-49)

名取武光、北海道国後島古釜府に於ける
後期薄手縄文土器期の竪穴様墳墓、考古学、
11(11)、1940、(名取武光著作集、1、50-62)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

高瀬克範・鈴木建治、馬場コレクション
の再検討:北千島の竪穴住居・土器・石器の
基礎的研究、北海道大学文学研究科紀要、
査読有、140、2013、pp.1-56

高瀬克範、河野コレクション(旭川市博
物館収蔵)の内耳土器、北大史学、査読有、
53、2013、pp.1-16

〔学会発表〕(計 2 件)

高瀬克範(2015) オホーツク海北岸・
カムチャツカ半島からみた「サハリン・千
島ルート」、北海道考古学会研究大会(北
海道大学(北海道札幌市))

猪熊樹人(2013) オホーツク文化期の
アイスピックとされる骨器について、日本
動物考古学会(慶應義塾大学(東京都港
区))

〔その他〕

根室市歴史と自然の資料館(2015)、北海
道大学植物園博物館蔵の根室関係資料パネ
ル展

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 克(KATO, Masaru)

北海道大学・北方生物圏フィールド科学
センター・助教

研究者番号: 50321956

(2) 研究分担者

高瀬 克範(TAKASE, Katsunori)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号: 00347254

(4) 研究協力者

猪熊 樹人(Inokuma Shigeto)

根室市歴史と自然の資料館・学芸員